巣立ち

大原富枝

毎日新聞社

巣立ち

大原富枝

毎日新聞社

巣立(すだち)

昭和五十八年一月二十五日 印刷
昭和五十八年二月 十 日 発行

定価 一、四〇〇円

著 者 大原富枝(おおはらとみえ)
編集人 川合多喜夫
発行人 関根 望
発行所 毎日新聞社
〒100 東京都千代田区一ツ橋
〒530 大阪市北区堂島
〒802 北九州市小倉北区紺屋町
〒450 名古屋市中村区名駅

印刷 精興社
製本 大口製本

© TOMIE ŌHARA Printed in Japan 1983

巣立ち

目次

文学と信仰

万葉の女歌人　11
和泉式部の愛と寂寥　22
くだきける思ひのほかの　27
情念の凝集　33
孤独と信仰　41
ハイネの若々しさ　48
オスカー・ワイルド　52
ソーニャという女性　57
少年カイ　75
平林たい子さんの小説　78
短歌とのかかわり　94

人と人影

中野重治氏の思い出　107
目黒清水町のこと　112

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

魂の呻き　116
伊藤孝太郎と大原愛蔵　120
思い出すことども　126

映画・演劇・絵画

「チャルラータ」と「大都会」　133
その圧倒的な女優陣　139
愛と苦闘の交響詩　142
「影身」の象徴するもの　145
現代ギリシャ悲劇　148
事件と群衆　153
上村松園の心　157
女たちと、そして母と　174

旅と寺と

古地図の場所　195
永遠的時空の美　198

土佐街道・野根山越え 204
一乗谷城址 206
私の大和風景 210
伝説と庶民の寺 216
私の興福寺 229
犬吠埼 241
よみがえる中世の興奮 246
若狭を歩く 256

わが街わが日々

わが街 263
オールドバーの儀式 266
野草の花 270
銀座への想い 272
料理の工夫 277
銘菓「標野」 279
やきものと花々と 283

琉球大島の袷　287
木枯しの季節　291
ほすすきに　293
巣立ち　299
女たち　304
あとがき　310

巣立ち

裝

幀

川

田

幹

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

文学と信仰

万葉の女歌人

額田王

日本で最も古い和歌集である万葉集の歌人たちのなかの女性たちは、日本の女の文学の出発点を担う人々としての栄誉を持っている。そのなかで代表的な位置をしめる額田王の存在は、別の見方をするとき、古代史、大和奈良時代の政治と文化を貫く女ということにもなっている。

そのような存在に彼女をおいたのは、生れ持った美貌と才能、あるいは華やいだ彼女の才気であろう。

鏡王という帰化人の血を引く身分の低い皇族の娘として、大和の額田部の里に生れた彼女は、姉の鏡女王とともに宮廷にはいって采女になっている。采女という女官の仕事は時代によって変化していて、時代が下がるほど台所の婢女に落ちてゆくようであるが、ごく初期である彼女のころは、巫女的性格が強くて宮廷の神事をつかさどり、その地位は低くはなかったと思われる。外国の使臣が来貢

したときの殿上の宴や野外の遊園の行事にもはべって、臨機速妙の和歌を詠み、輝く美貌と、才気煥発の会話でもてなし、宮廷の文化的品位の誇示と華麗さを発揮する役割をもしていた。

額田部の父のもとに少女であった日に、彼女は、中大兄皇子、大海人皇子という宿命的な兄弟の皇子の狩猟の場に出会い、弟の大海人との間に十市皇女まで持つようになっている。その彼女が宮廷にはいってからは兄の中大兄皇子の妃の一人になっていることにも、彼女が采女という地位にあったことと深い関係があったにちがいない。姉の鏡女王がやはり采女になり、天智の妃になったのち、藤原鎌足に賜う形でその妻になっている。

君待つとわが恋ひをれば吾が屋戸のすだれ動かし秋の風吹く　　額田　王

の歌に対して、姉の鏡女王が、

風をだに恋ふるは羨(とも)し風をだに来むとし待たば何か嘆かむ

と詠んだものが残っている。一時期、姉妹が同じく天智の妃であった時代のものといわれている。

熟田津(にぎたづ)に船乗りせむと月待てば潮もかなひぬ今は漕ぎいでな　　額田　王

彼女の生きた時代の大和朝廷は、内にも外にもたくさんの問題を抱えていた。帰化人たちの勢力も富裕な財力を有していて侮りがたいものがあったし、蘇我氏は天皇家にあわよくばとって代ろうとするほど強大になっていた。聖徳太子遺児の問題もあった。蝦夷の問題もあった。外には唐、新羅、高句麗、百済などの大陸の問題があって、常に影響を及ぼしている。

斉明女帝は百済を援けるために筑紫に行宮をすすめた。熟田津は伊予の港で、そこに寄港して月を待ったときの彼女の歌である。これは斉明女帝に代って詠んだ船出の歌であろうが、格調が高く、十分女帝の歌として通る堂々とした調べを持っている。

このような政治情勢と彼女のおかれていた位置が、生来の彼女の才能をいっそう鋭く磨きあげていったと思われる。やがて国内の複雑な政治情勢に迫られてであろう、近江遷都が起る。

「味酒(うまさけ)　三輪山　あをによし　奈良の山の……」にはじまる彼女の長歌と、その反歌、

三輪山をしかも隠すか雲だにも情あらなむ隠さふべしや

も、ともに大和への惜別をうたって心に沁みる哀調を帯びている。大和は彼女が生れて育ち、恋をし、子供を生み、宮仕えをした土地である。別離のかなしみの深さが秀歌を生んだのであろう。大和平野は三輪山、葛城、金剛、二上の山々に囲まれ、耳成、畝傍、香具の三山をやさしく浮べて、つい近年まで昔の面影を割合よく残していた。ほんの小さい流れになってしまった飛鳥川のほとりを歩いていると、大和への彼女の愛惜の思いがわかるようであった。

近江朝廷で中大兄はようやく長い皇太子時代、称制時代に終をつげて即位し、天智天皇となる。しかし近江朝廷は額田王にとってもなんとなく暗い、不吉な空気のただよう世界ではなかったろうか。天皇も弟の大海人ももはや青年ではない。天皇はもう五十四歳、身体の衰えを感じるとともに、皇太弟として次代の皇位につくはずの弟の存在に圧迫を感じるようになっていた。皇位につけるべきわが子（大友）のことがいつも頭にあった。

あかねさす紫野ゆき標野行き野守は見ずや君が袖ふる

この歌は世に膾炙している相聞歌であるが、この歌の生れたのは近江大津の宮もごく初期であろうか。おそらく大海人も四十歳は越していたにちがいない。額田王も三十代の終近いかあるいは四十代にはいっていたであろう。

むらさきのにほへる妹を憎くあらば人妻ゆゑにわれ恋ひめやも

大海人のこの返歌とともにこの相聞歌は、じつは酒席の座興として詠まれたものといわれ、二人の表情はからりと乾いたものであったはずである。

しかし、壬申の乱が起ってからの近江朝廷側に残った額田王の本心はどうだったであろう。近江の鮎の腸（はらわた）を抜いて焼いた腹に、大友皇子側の動勢を知らせる文を忍ばせて、吉野に籠った大海人に送

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.